

## 富士講の地域的展開

### — 東京都東久留米市下里と東京都清瀬市中里の丸嘉講を中心として —

奥村 南

「講」とは同一の信仰を持つ人びとによる結社であり、日本の村々にはその村の住民を中心とした講が多く存在した。元々講とは平安時代には仏典を講読・研究する僧の集団を指すものであった。後に仏典の講読を中心とする講会を指すようになり、さらに各種の仏教儀式一般に講という名称をつけるようになった。この講が中世ごろから民間に浸透する過程で多様な信仰集団に「講」という名称がつけられるようになっていった。経済的な金融組織としての講や庶民の相互扶助のための組織としての講が定着していったのである。近世になると社会的講も盛んになり、労働力交換のための講や葬式のための講、世代別・男女別に組織する講などさまざまな種類の講組織がみられるようになった。また地域社会に生活基盤をおく農山漁村ではその生活の安泰と豊穰や豊漁を願う宗教的講を結ぶことも多くあった。さらに自然に対する信仰を行なう講も存在し、各地の有名な山や神社などに参詣する講の種類も多数存在していた。各講は飲食を伴い、慰安・娯楽の機会や地域での相談ごとや取り決めをするなどの機能も果たし、相互扶助や情報交換の組織として必要とされ各地に増大していったのである。

本稿で取り上げるのは講のなかでも信仰対象が遠隔地にある参詣講で、富士山を信仰の対象とした富士講である。富士山は日本一高い山であり、霊山として人びとに崇拜されて

きた。元々富士山信仰は山岳信仰に端を発するもので、富士講が成立する以前から修験者などの山伏の間では修行の山として敬われてきた。関東から見える富士にたいして江戸庶民は信仰心をもち、その独自の信仰形態から江戸八百八講といわれるほどに広がっていったのである。しかしその存在は時代の情勢の移り変わりの中で衰退し消滅していき、現在では東京都内で活動を続けている富士講は非常に少なくなっている。

本稿ではこのような状況でもいまだに存在を維持させている富士講はどのようにしてその活動を続けているのか、また現在までも存続している講がその地域でどのような展開をしてきたのか考察を試みたい。本稿では現在存続している富士講のなかでも武蔵野の地域に広まった富士講である「丸嘉講」について取り上げた。武蔵野の地域に富士講が広がっていったのは、富士講が江戸の町へ流布していった時期と同時期と考えられる。武蔵野の富士講の場合他に類を見ない形態で、同系統の講が広い地域にわたって連合体を形成し、各地域の講のリーダーから全体を統率するリーダーが選ばれ、連合体としての講をまとめあげていた。現在では広い地域にわたって活動していた講も清瀬市中里と東久留米市下里のみとなっているが、その活動は顕著である。本稿ではまず丸嘉講の成立と展開を述べ、それぞれの地域の丸嘉講の実態を記した。そ

して丸嘉講がこれまで継続してきた要因を連合体としての講の年中行事からとそれぞれの地域の独立した存在としての講の実態から考察した。また、丸嘉講の地域住民との関わりやその地域でどのような機能を果たしているのか、その展開からも丸嘉講の存続要因の考察を試みた。

第1章の先行研究と問題の所在ではまず富士講についての基本的研究と、本稿のテーマである武蔵野の富士講についての研究を紹介した。富士講の研究で有名なのは岩科小一郎の『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』であり、東京における富士講の習俗について民俗学的な立場で調査を行い、また富士講開祖ともいわれる角行やその弟子で富士講を江戸に広めた人物である身禄などの富士講の系譜の中ですぐれた人々の痕跡と思想について述べている。本研究のテーマである武蔵野の富士講については平野榮次が山岳宗教史叢書8『日光山と関東の修験道』に「武蔵野の富士講」を載せ、その歴史的展開について述べている。さらに武蔵野の富士講である丸嘉講田無組については、新谷尚紀が『富士講と富士塚—東京・埼玉・千葉・神奈川—』に「丸嘉講田無組の展開とその史料」を掲載している。ここでは丸嘉講田無組の成立についての記述と、丸嘉講関係史料とそれによる丸嘉講田無組の略年表を作成したものを記している。武蔵野の富士講についての記述はいずれもその成立や歴史的展開についての概要を述べるのみにとどまっており、現在の丸嘉講の実態やその存続要因については触れていない。

次に問題の所在として都市化による講集団の変容について平野榮次の『富士信仰と富士塚』「都市化と信仰」から述べた。平野は「都市化と信仰」のなかで講集団の衰退と成長に

ついて述べており、村で行なわれる講と代表者が遠方の名山や大社などにお参りにいく代参講の都市化による変容を論じている。村で行なわれる講については、講員は在来の住民の範囲を超えることができず、講の活動を行なう場である宿となっても家屋の広さなどの問題から不具合が多くなり、講廃絶に拍車がかかったとしている。代参講の場合は、遠方の地へ参詣に行くのが講の行事となっているため、観光としての旅行の方式が取り入れ、新住民の加入が増えており中には盛んになっている講もあるとしている。しかし富士講については、その活動の独自性と登山行の困難さのために講員の範囲は在来の住民から抜け出せず、都市化と共に衰退していったと述べている。本稿の研究対象である丸嘉講も、現在では二つの地域しか現存しておらず、平野の説が当てはまることもある。しかし現存している丸嘉講をみるとその活動は顕著で衰退の一途をたどっているわけではないのである。本稿では現在もその活動を勢力的に行なっている清瀬市中里と東久留米市下里の丸嘉講について調査し、その実態から都市化による時勢のなかでどのように講を存続させてきたのか、その要因を探っていくものである。

第2章では江戸時代に成立した富士講とはどのようなものか、その歴史と展開を岩科小一郎の『富士講の歴史—江戸庶民の山岳信仰—』を参考にした大まかな流れを紹介し、さらに本稿の研究対象である丸嘉講田無組の成立と武蔵野への広がりを述べ、その中心となった田無の丸嘉講についても記し、丸嘉講田無組がどのようにして連合体となるに至ったかの考察を試みた。

富士講とは富士山とそこにいる神への信仰を行なうための集団である。もともとは山で修行をする修験者などによって信仰されてき

た。15世紀にはいるとこれまでの修験道と異なる信仰形態を作り上げた角行という人物が現れる。角行は戦乱の世に生まれ、治国救済祈願のため富士山西麓にある洞窟に入って厳しい修行をしたと伝えられている。角行は自ら創り出した文字を用いてさまざまな護符やのちの富士講の経典となる「御伝え」などを創り出した。角行は江戸でその布教活動を行ったが、あまり成果を得られなかった。17世紀初頭には角行五代目を継いだ月行の弟子に富士講中興の祖といわれる食行身禄があらわれる。身禄は商人として成功し、裕福になるがその全財産を親戚縁者にすべて分け与えて自分は修行をするというほど熱心な富士信仰者であった。このときの世は將軍徳川綱吉の「生類憐みの令」に加え、次代の吉宗の時の米価問題、飢饉、打ちこわしなどで荒れていた。混乱した世の中を嘆いた身禄は世直しのため富士山で断食による入定を決意したのである。1736年身禄は富士山七合五勺の烏帽子岩にて断食入定をはたした。この身禄の入定がきっかけとなり、のこされた弟子達が江戸を中心に富士講を弘めはじめた。角行の信仰は富士山の神への信仰であるが、それ自体は既存の宗教に属さず、身禄没後に成立した講集団も単独の信仰形態であった。一般に地域社会や村落共同体の代参講としての性格をもっており、富士山への各登山口には御師の集落がつくられ、関東を中心に富士講徒は布教活動を行い、富士山へ多くの参拝者を引きつけた。明治以後、明治政府の宗教政策によって富士講は一時その勢いを失うが、富士信仰の諸勢力を結集して国家神道に動員しようとした宍野半によって一部が教派神道と化し活動を続けていくこととなった。戦後は富士山や周辺の観光地化と登山自体がレジャーと認識されるようになったため、富士登山に信仰

を求める必要がなくなり、富士講は衰退していったのである。富士講の形態としてはリーダー的存在の先達、資金面担当の講元、講員の勧誘や資金集め担当の世話人の三役があり、その下に講員がいる。活動としては定期的に行なわれる富士講の経典である「御伝え」を読む「拝み」と呼ばれる行事や富士登山、祭壇を用いて線香の束を三角に積み上げて燃やす「お焚き上げ」などがある。以上が富士講の主な概要である。

本稿の調査対象である武蔵野の丸嘉講は身禄の弟子である近江嘉右衛門を祖とする講で、嘉右衛門の三人の弟子の一人である善行道山が1800年頃に武蔵野の地へ広めた。そこから村々へ「御伝え」が伝わり、丸嘉講が増加していった。田無・門前一带を中心として展開した丸嘉講は丸嘉講田無組とよばれ、勢力的な活動を行っていた。丸嘉講は武蔵野一带に広まっている講が田無組という一つの連合体となり、各村の丸嘉講の先達の代表としての大先達が存在し、武蔵野一带の丸嘉講を統括するというほかには類をみない形態である。連合体としての丸嘉講の組の中心ともされた田無では、以前はさまざまな講が存在しており、活発な活動を続けていた。田無における富士講員の数は多く、1889年には104名もいたことがわかっている。丸嘉講は身禄の直弟子や身禄の影響を強く受けている有力な先達が講祖となっており、その布教活動は精力的であった。田無の名は台地上のため水にとぼしく水田が無かったことに由来するといわれ、実際に水田はなく土地利用は畑地と住宅である。田無は全国の市では複数の大字に相当する区域をもたない唯一の市であり、全国でも四番目に小さい市であった。丸嘉講が田無を中心に広がり、連合体としての発展をとげたのは、田無の先達や講員がその

地の規模や土壌などから他地域との協力をもとめる意味もあり、積極的に活動をしたからだと思われる。また、田無には富士講の人びとが通る富士街道と呼ばれる道があり、さらにその周辺には小金井街道や青梅街道など主要な道が多く存在していた。この街道沿いには多くの富士講が展開しており、このような街道の利用によってその布教範囲が広がっていったと考えられるのである。

第3章では調査対象である丸嘉講田無組の清瀬市における中里講社についての成立とその実態について述べ、中里講社に付随する富士塚である「中里富士」について記した。さらに丸嘉講田無組のもう一つの地域である東久留米市の下里講社の成立と展開について述べ、下里講社に付随する富士塚である「三角山」についての実態も記した。中里は清瀬市の北部にあり、地域の北側を流れる柳瀬川の向こうは埼玉県所沢市で、平坦地に野菜畑が広がり、畑の中には森がありその森の中に集落があるという景観を示している。丸嘉講中里講社の成立について書かれている「清瀬村中里富士講社起源」によれば、中里富士講の創立は善行道山よる田無の秀行道山を経て、中里の小俣太郎兵衛に「御伝え」が渡されて成立した講であると記されている。また中里講社付属の富士塚である中里富士にある石碑には中里講社の講員名が書かれているものが数個あり、大多数の講員が存在していたことがわかる。現在の丸嘉講中里講社は先達一名、役員六名、講員約五十名により構成されている。清瀬においては、中里に丸嘉講田無組の本元があり、清瀬から東久留米、田無、保谷（現西東京市）のすべての大先達となってきたことから中里の富士講は活発な活動を続け今日にまで至っている。講の行事としては富士吉田の浅間神社への初詣、中里富士のお山開き、

富士吉田でのお山開きの参加、富士登山、富士吉田での火祭りの見物、中里富士での火の花祭、中里集会場での星祭などがある。このうち下里講社と連合で行なうのは初詣、富士吉田でのお山開き、富士登山、富士吉田火祭りの四つである。

丸嘉講下里講社は下里の氏子会員が所有している「御伝え」には、身禄以後十人の先達を経て1920年に下里の先達へこの御伝えが伝わったことが記されている。また、丸嘉講田無組専属の富士吉田にある御師宿には、丸嘉講下里講社の先達や講員の名前を記した記念板があり、下里講社が活発に活動してきたことがうかがえるのである。現在の下里の丸嘉講は先達一名、講員数名と非常に少なくなっているが、そこに下里氏子会の会員約五十名が参加しているため、もともとの講員と氏子会の会員をあわせると五十数名となる。現在の丸嘉下里講の先達は平成10年(1998)に先達になっており、毎年必ず富士登山では頂上まで登っている。現先達の先代の先達は現先達の父であり、その意思をついで先達となっている。清瀬市と東久留米市連合の丸嘉講の大先達は中里と下里が連合する行事などでは各地域の先達が交互に大先達を務めていたが、近年では下里の先達が続けて大先達を務めている。下里の富士講の古くからの講員は数名であるが、下里富士のある浅間神社は同地区の氷川神社の管轄下に移行し、昭和34年ころから氏子会が中心となって運営されるようになって講員も多人数となっている。しかしもともとの講員と氏子は別だとする考えもあり、正式な丸嘉講下里講社の講員のみの人数はかなり少なくなっている。

第4章では各地域の講で毎年行われる行事の詳細と、行事におけるそれぞれの講との関係性や地域住民との関わりを考察した。そこ

からこの地域での丸嘉講が現在まで存続してきた要因を探り、地域社会での展開を述べている。連合体としての丸嘉講の行事は年に4回あるが、本稿ではそのなかで6月31日に富士吉田で行なわれる山開きの行事と、7月24日、25日に行なわれた富士登山について取り上げた。丸嘉講連合の行事には、下里の氷川神社からの寄付金や地元のコンビニからのお茶の差し入れなどがある。氷川神社からの寄付金は下里氏子会が丸嘉講に参加するという形をとっているためであり、コンビニからのお茶の差し入れは町内会の計らいであった。丸嘉講は町内においてもその存在は明確な位置にあることがわかる。富士吉田まで行くバスの中では各地域の講員同士や氏子達との会話がはずみ、そのなかで自分の畑の作物のできの良し悪しや、作物の良い育て方のアイデアを出し合うなどしている。さらに各家の近隣の情報や近況の移り変わりなどをお互いに話し合い、情報交換の場として機能していたのである。富士登山では大先達の意識下において講が重要視されていることや、厳しい登山の行事に対して毎年多くの下里氏子会のメンバーが参加するというように、丸嘉講と氏子会の人びとによる熱心な活動と信仰心によって継続して行なわれていることがわかった。各地域への行事の参加は講員たちにとって旅行という観念もあり、それが参加を促進させる要因でもあるが、各地域連合での参加はお互いの情報交換の場としても利用されているのである。また、各地域連合で行なう行事を一定期間にあまり間をあげずに行なっていることから、相互の連帯感を維持する機能も持っているのである。

次に丸嘉講の各講社別に行事や地元住民との関係から講存続の要因を考察した。丸嘉講中里講社においては年中行事のひとつである

「火の花祭」を取り上げた。火の花祭は毎年九月一日に中里富士で講員が三角錐に積み上げた麦藁を燃やして経文を唱え、参拝者の御祓いと無病息災などを祈る祭りである。これは他の富士講では見られない特異な行事であり、1985年には東京都により無形民俗文化財に指定されている。火の花祭は地元の中里共栄会や婦人会共同で開催している盆踊り大会とセットで行なわれており、盆踊り大会終了時には先達がこのあとの火の花祭に参加するようにと呼びかけることになっている。盆踊りの帰り際に中里富士に立ち寄る人びとも多く、境内は毎年参拝者でいっぱいになる。盆踊り大会以前は中里に伝わる芸能である「中里万作」が中里富士で行なわれており、これによっても人びとが多く集まったという。また、参拝者の多くは麦藁の山が燃えたあとの灰をもらいに来ている人々で、この灰は厄除けや家内安全、畑にまくと豊作になるなどと言われており、参拝者は競って灰を集めていく。このように毎年火の花祭の参加者は衰えず、麦藁の灰を厄除けやお守りになると信じて、灰を取りに来る人も驚くほど多く、地域住民の信仰の強さがうかがえる。丸嘉中里講社が現在までも存続してきたのは、講社の活発な活動はもちろんのこと、このような珍しい形の祭の存在と、地域との連結と協力による祭の執行によるところが大きな要因となっているのである。

下里講社においては下里氏子会との関係性について取り上げた。下里講社の講員の数は数名程度となっておりその存続が危ぶまれるが、そこに下里氏子会が講員として参加することによって、50名以上となっている。下里の氏子は地域の祭りや芸能などに対して熱心に取り組んでおり、その活動は顕著である。下里氏子会は富士講に限らずこの地域の他の

講にも積極的に参加して活動に取り組んでいるのである。かつて下里講社持ちであった富士塚である三角山も下里講社から氏子会へと引き継がれ、毎年のお山開きの際には下里講社の講員を招待するという形で塚の清掃を行ない、きちんとした管理を行なっている。かつての下里村の人びとは農業を営み、共同生活に励み、産土神を中心としてこれを祈り、感謝の心を捧げながら発展を遂げてきた。このように下里地区の氏子は信仰心が厚く、先祖が伝えた伝統行事を良く守り、現在までも継承しているのである。丸嘉講に参加している下里氏子会のメンバーは丸嘉下里講社の講員とは区別され、正式な講員ではないとされているところに大きな問題はあるが、今日まで丸嘉下里講社が存続してきたのには、下里氏子会の熱心な活動があったからなのである。

丸嘉講田無組が他にはみられない連合体として活動を続けてきた背景には、最初に富士講が伝わった田無の講徒の熱心な活動と、富士街道や小金井街道などの主要な道路が各地域に通っていることなどの土地の特徴もあり、また武蔵野の地域の村民の連帯感や結束力が強かったことも理由としてあげられるであろう。そのなかでも丸嘉講が現存している清瀬市中里と東久留米市下里では、まず中里講社については他の富士講にはみられない特異な行事である火の花祭からの存続要因の考察を試みた。それは地域の共栄会や婦人会などとの協力による祭の形態による大勢の地域住民の参加に伴うところが大きく、それには地域の人びとの信仰心によるところもあることがわかった。火の花祭成立当時からその形態は現代の中里でも地域住民に受け入れられやすい形態だったのである。下里講社については、地元の氏子会の存在がその存続の重要

なポイントであった。下里の氏子会は丸嘉講に限らず、この地に残るさまざまな講や芸能などの活動にも活発に参加しその存在を継承してきた。下里氏子会が属する氷川神社での祭りもその準備から盛大に行なっている。下里講社付属であった富士塚の管理も行なっており、富士講の行事の一つである塚のお山開きの清掃も毎年欠かさず行なっており、それには下里講社が招待されて参加する形をとっている。また中里下里連合の行事の祭には多くの氏子会のメンバーが参加しており、丸嘉下里講社の存在は下里氏子会によって存続しているといっても過言ではないのである。

このように各地域それぞれ独自の形で存在を継続させてきた中里講社・下里講社はさらに連合体をなし、その活動をつづけているところにも存続の重要な要因がある。連合体としての行事は年に四回あり、いずれも富士吉田などの遠隔地へ行く行事である。この連合体としての行事では、行き帰りのバスのなかでの宴会や旅先での盛大な直会が行なわれており、日ごろの生活から抜け出せる娯楽としても考えられ、またお互いの情報交換の場としても機能しているのである。